

令和2年度

研究集録

研究テーマ

「協同性を育む保育の在り方」



上尾市立平方幼稚園

1 研究主題

『協同性を育む保育の在り方』

2 主題設定の理由

今年度は、少人数での教育活動を展開していく。その中で、幼稚園教育要領の中で謳われている幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿のひとつである「協同性」を育むためには、各年齢の発達段階を踏まえた活動や異年齢での活動の両方から様々な遊びや活動を計画的に取り入れることが大切であると考え。さらに少人数の中でも幼児一人一人が、遊びが充実し、友達との関わりを深め、互いを認め合い、徐々に共通の目的をもって実現する喜びを味わうことができるような保育の在り方について追究したいと考え、本テーマを設定した。

3 研究の観点

- ① 幼児一人一人の性格・興味・関心・発達・経験の把握
- ② それぞれの発達段階における協同性の芽生えや広がりをつえる
- ③ 少人数の中で協同性を育むための計画的な活動と工夫
- ④ 異年齢の関わりを通しての保育の展開・活動の充実
- ⑤ 協同して遊ぶようになるための環境構成や教師の援助

4 研究計画・研究内容

- ① 幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿「協同性」の内容を理解する。
- ② 研究課題の方向性を共通理解する。
- ③ クラス全体として、または幼児一人一人の中に「協同性」の芽生えがあるか、育てているかなど生活や遊びを通して細かく見取る。
- ④ 少人数の中で幼児が協同性を育むために必要な経験は何かを考え、保育展開の工夫や環境構成、教師の援助をする。
- ⑤ 異年齢での保育の展開や活動を工夫し、様々な人と関わり、多様な関係性の中で協同性が育めるようにする。
- ⑥ 遊びの中で友達との関わりが生まれてくるような環境や援助を考える。
- ⑦ 幼児が主体的に活動できるような環境構成や援助をする。また、一人一人が自己充実する姿を大切にしながら、友達と遊ぶ中で多様な感情体験を味わい、関わりを深めたり、共通の目的をもって実現する喜びを味わったりできるようにする。
- ⑧ 様々な実践を重ねていく中でさらなる幼児の協同性の芽生えや広がりを捉える。
- ⑨ 実態を踏まえて評価・反省し、指導計画の作成や今後の保育展開について教師間で共有する。

4歳

期	月	ねらい	幼児の具体的な姿 (_____ 協同性の芽生えが見られた場面)	☆環境構成・◇教師の援助	考察
4歳 I期 (6月)	6月 中旬・ 下旬	○自分の好きな遊びを見つけて、自分から遊ぶ ○好きな遊びを楽しむ中で先生や友達に親しみをもつ	<p>(砂遊び)</p> <ul style="list-style-type: none"> 園生活に慣れ、様々な遊びの環境に興味を持ち、喜んで遊び始めたり、自分なりの動きを試して楽しんでる姿が見られた。 「今日も裸足で遊ぼう」と、前日に楽しんだことを翌日も友達と楽しむ姿が見られた。 砂場では、「僕もブルドージャーだ!」「こっちから砂を集めよう」など、繰り返し、動きを友達と試し、自分たちのイメージがながって遊んでいることが楽しい様子が見られた。 	<p>☆幼児が興味もてる環境、「楽しそう」「やってみよう」と思えるような環境を構成した。</p> <p>☆思いを出して、満足いくまで遊べるように十分に満足できる時間の確保をした。</p> <p>◇幼児が好きな遊びを見つけて、楽しんでいけることを教師も一緒に楽しみ、思いを共感し、教師との信頼関係を築けるようにした。</p> <p>◇同じ場で遊ぶ友達のしていることや楽しんでいけることを知らせ、同じ場で遊ぶ心地よさや楽しさを感じられるようにした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 園生活に慣れ、自分のしたい遊びを十分に楽しみ、幼稚園で安心して遊ぶことが大切である。その基盤ができることで、友達存在に気付き、一緒に過ごす楽しさが感じられるようになり、それが協同性を育む土台となっていくと思われ。そのためには、興味もてる環境、思いを出して遊べる環境の構成が必要と考え、実践した。
4歳 II期 (7月)	6月 中旬	○友達に親しみもち、同じことをしたり、関わったりして遊ぶ	<p>(ダイナミックな絵の具遊び)</p> <ul style="list-style-type: none"> 絵の具遊びでは、友達と同じような動きをしたり、同じようにことをしたりすることの楽しさを感じている様子が見られた。 五感を使って、感触や心地よさを味わいながら遊ぶ中で、心が開放されて、自分の思いを動かすのびのびと表していた。 	<p>☆砂・水遊び、絵の具遊びなど、五感で感触を十分味わう経験を多くできるような計画を立て、気持ちを解放して遊ぶ中で友達と一緒に過ごす楽しさも感じていけるようにした。</p> <p>◇遊びの中で、友達と「楽しい」「気持ちいいね」など、気持ちを共感し合えるように、教師がそれぞれ楽しんでる姿や感じたことを言葉にして、互いに伝わるようにした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 全身で遊ぶことが好きな二人の実態を踏まえ、大きな紙でのクレヨン遊びやいろいろな絵の具の活動を通して、思いきり遊べる遊びを多く計画した。手形・足形の絵の具遊び、ローラー遊びでは、友達と一緒に楽しみ、「今日は気持ちよかったね」「また、やりたいね」という気持ちのつながりが友達との仲を深めた。そういう経験が「一緒に○○しよう」と遊び始める姿につながったと考え。 同じことをしたり、同じ動きをしたりすることは友達存在を意識したり、刺激を受けたりしている姿である。こういったことが協同性の芽生えの一歩だと考える。

<p>4歳 11期 (7月)</p>	<p>7月 上旬</p>	<p>○友達に親しみを持ち、同じことをしたり、関わったりして遊ぶ</p>	<p>(年長児に刺激を受ける姿)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鬼ごっこ、ドロケイなど、年長児と一緒に遊ぶことが楽しくなってきた。それと共に「年長さんみたいに、速く走りたい」「どうやったら速く走れるの?」と憧れの気持ちが強くなっていった。 ・憧れの気持ちと共に、「年長児と一緒に遊びたい」という親しみの気持ちも強くなり、二階に遊ぶ中で年長児の姿をよく見て、真似てやってみる姿がいろいろな場面で見られた。 ・また、年少は2人であるが、たくさんの友達と鬼ごっこやドロケイをすることの楽しさを感じるようになり、教師がいなくても、自分達で仲間に加わって遊んでいた。 ・家庭でも、速く走る練習をするなど刺激を受けている姿が見られていた。 	<p>☆年長児と一緒に遊べる時間を確保できるように週や日の計画を立てるようにした。</p> <p>◇「年長さん、すごいね」という憧れの気持ちを受け止める。また、年長児の活動や姿を目を向けられるように気付けさせる。</p> <p>◇年長児一人一人との友達関係を築けるように仲立ちし、時には、教師は様子を見守り幼児同士の関わりを大切にするようにした。</p> <p>◇年長児と関わることで「みんなで遊ぶと楽しい」という気持ちやいろいろな幼児と触れ合う中で「○○君は面白いよね」「○○君が教えてくれたよ」など、その子らしさを感じ取る気持ちを大切に受け止めた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年少組だけであると、大勢の友達の中で過ごす楽しさを感じる経験やいろいろな友達の違いや遊び方に触れる経験が少なくなってしまう。しかし、たくさんの時間を異年齢で生活するようになると、年長児の中に入っても、安心して遊べるようになってきた。 ・憧れの存在ができることで、意欲につながり、相手の姿をよく見て真似たり、相手の話に耳を傾けたりする姿が見られた。異年齢での関係は、憧れの気持ちを抱くことだけでなく、様々な場面で吸収することがより大きくなると感じた。
<p>4歳 11期 (7月)</p>	<p>6月 下旬 ・ 7月 上旬</p>	<p>○友達に親しみを持ち、同じことをしたり、関わったりして遊ぶ</p>	<p>(年少同士で刺激を受ける姿)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の姿が目が向くようになり、つくって遊ぶ中では、「僕も○○くんみたいにしよう」「僕もやりたい」と相手を意識し、工夫したり、取り組んだりする姿が多く見られるようになった。 ・製作活動や戸外でのジャングリズムなど、「僕もできるよ」「僕の方がすごいよ」という『自分の力でできる』という充実感が、様々な遊びへの主体的な姿につながっていた。また、『負けないぞ』という気持ちも芽生えていた。 ・同じ物ができて嬉しい、同じことをしていることで気持ちがつながっていく様子も感じ取れた。 	<p>◇相手のしていることに気付けるような言葉かけを意識し、友達の工夫しているところや得意なことを知って、「すごいね」「頑張っているね」と認める気持ちを大切にしたい。</p> <p>◇友達に刺激を受け、「僕もやってみよう」という気持ちを受け止め、できないところを支えながら、工夫する楽しさや新たなことに挑戦する面白さを味わえるようにした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・刺激を受けている姿は、相手を認めたり、「すごいね」「いいな」と感じる心の現れでもあると考える。 ・協同性を育む中では、「相手のよさを知る、認める」ことが後に、互いの考えを出し合って、協力することにつながっていくので、4歳の「いいな」「すごいな」という気持ちは、協同性の芽生えの大きな一つであると思う。刺激を受けたときに、それを認めたり、自分もやってみようという気持ちを育てるようになり、するたためには、友達のようにしていることに関心が向けられるようにする教師の援助が重要だと感じた。

<p>4歳 II期 (7月)</p>	<p>7月中旬</p>	<p>○友達に親しみを持ち、同じことをしたり、関わったりして遊ぶ</p> <p>○感じたことや思ったことを言葉や動きで表す</p>	<p>(電車遊び)</p> <p>・二人は、遊びの中で「ここに10秒止まってから、出発しよう」など遊びのルールや遊び方を決めていた。</p> <p>・「次はどこに行く?」「次はホールに行こう」「この階段は通らないようにしよう」など動きを合わせるだけでなく、言葉で伝えて一緒に動く姿が見られるようになった。</p> <p>・年長児とも教師の仲立ちがなくても、声を掛け合って一緒に乗って遊んでいた。</p> <p>「ゆうたくくん、出発するよ、乗って」など年少から年長児への言葉掛けも聞かれた。</p>  	<p>☆積み木で新幹線をつくって遊んでいた姿が見られたので、段ボールで新幹線を用意した。「同じ物を使いたい」と思いがぶつかり合ったり、折り合いをつけたりする経験にもつながると思ひ、二種類用意した。</p> <p>◇二人がどんな風に遊び出したり、互いに思いを出したりする様子を見守った。</p> <p>◇特に新幹線の種類にこだわられる様子はなかったが、「交換しよう」などの言葉のやりとりはなく、なんとなく、交換している様子があったので、言葉で相手に伝えられるように知らせた。</p> <p>◇遊びの中で「ここに10秒止まってから、出発しよう」など遊びのルールや遊び方を二人で決めていた。伝えたり受け入れたり遊ぶ様子を確認できるようにした。</p>	<p>・思いがぶつかり合うのではなく、二人は使いたいと思っている新幹線にこだわることもよきも、一緒に新幹線に乗っているいろいろな所に行くことが楽しい様子であった。そのために、「行き先」や遊び方も相手と会話しながら、二人で決めていた。</p> <p>・この遊びでの経験では、言葉でやりたいたいこと、したいことを相手に伝えることが増えたことである。「友達に分かってもらいたい」「一緒にやりたい」という思いが自分の思いを表現するということにつながっており協同して遊ぶためには、大切な一歩であると思われる。</p>
<p>4歳 II期 (7月)</p>	<p>7月</p>	<p>○友達に親しみを持ち、同じことをしたり、関わったりして遊ぶ</p> <p>○感じたことや思ったことを言葉や動きで表す</p>	<p>(飼育活動)</p> <p>・教師と一緒に飼育物の世話をする中で、わたるはカタツムリをもつことができたが、じんたができなかつた。毎日、教師と3人で世話をしている中で、自分ができると、苦手なことがわかり、友達と一緒に協力し合う場面が見られるようになった。</p> <p>・「わたるくん、カタツムリの中に入れて。僕がもつてるから」「いいよ。じゃあ、僕が蓋も閉めるね」など、自分のやりたいことを伝えたり、相手がやろうとすることを受け入れたりする言葉のやりとりが聞かれた。</p> 	<p>◇世話をすることに関心をもち、自分達でできるという気持ちが見られ始めたので、二人にできることを任せながら一緒に行うようにした。日々の中で「二人でやれたよ」という気持ちを味わえるように「ありがと」「二人でできたなんてすごいね」と関わるようにした。</p> <p>◇「先生できない」と言った時に、「○○くんが上手に昨日やってくれたよ」と伝え、幼児同士で協力できるようなきょうかけをつくる。</p>	<p>・生活の中で、年少児にもできるような場面、互いのできることを認めたり、助け合ったりすることで友達と成し遂げられたという経験はこの時期でもできる大切な経験だと思ふ。</p> <p>・飼育の場面では、どっちが蓋を洗うか、入れ物を洗うかで、揉めたり相談したりする場面が見られ、そういう毎日の生活の場面でも協同性の芽生えの一つと捉え、見守ったり、認めたり、一緒に考えたりすることが大切だと感じた。</p>

4歳
3期

(8 月 下 旬) (1 0 月 中 旬)

10月
上旬

○気の合う友達と関わり
を楽しみ、自分の思いを
伝えようとする

(サッカー遊び)

・サッカーゴールで、キーパーとシュートする人で遊び始めた。大きなゴールを守りたい幼児が多
「狭いよ」「前に立たないで」とぶつかり合う場
面が遊ぶ中で増えてきた。

わたるは、シュートしていた子から「交代して」と声を掛けられたが、「やだ」と答える。そして、友達に「ずっとやっててほしいよ」と言われて黙ってしまふ。「まだやりたいの?」と教師が声をかけると、頷き、そのことを伝えてみるように促した。わたるが「まだやりたい」と答えると、それを聞いていた子が「あと何回で交代してしたらいいんじゃない?」と提案してくれ、と、「わかった」と答えて、その話に応じていた。少しすると、わたるは交代し、その後、わたるは友達に「交代して」と自分から伝えていた。



☆友達や年長児と一緒に遊び方を決めたり、相談したりするサッカー遊びの場になったので、継続的に設定し、友達とやり取りできる機会になるようにした。

◇友達との遊びの中でどんな思いの出し方をしているか見守りながら、自分のやりたいことを言葉にできるように必要に応じてきつかけをつくる。そして、自分の思いが友達に思いが伝わる経験を重ねていけるようにする。

◇友達の思いを聞く場面をつくり、相手の気持ちを知って、感じたり、感じたことで自分の思いが変わったりしていくことを大切にす
る。

◇一緒に遊ぶ友達とぶつかり合う経験を見守り、葛藤体験を大切にす。教師が共感したり、受け止めたりすることで、自分の気持ちに折り合いをつけていく支えとなるようにす
る。

・一学期は、自分の思いを主張したり、そのことで友達とぶつかり合ったりする場面はあまりなかった。しかし、二学期に入り、友達や年長児との仲が深まっていくとの同時に、自分の思いが出せるようになっていった。そのことで友達と思いがぶつかる場面が見られるようになり、このことを通して、自分とは違う相手にも思いがあることに気付いたり、それを知り、葛藤したりする経験につながった。

・相手にも思いや考えがあることに気づき、自分の思いをどのように表すのか、どう折り合いをつけるのか、経験を重ねることが四歳児の二学期は大切であると考える。主張が受け入れられない悔しさ、それを乗り越える力、教師や友達に気持ちが届かなかった悔しさなど、様々な感情体験を経験することで友達との関わりが深められていくことがこの時期に必要な協同性の芽生えの一つだと思ふ。

4歳
川期

10月
中旬

○大勢の友達と一緒にいろいろなルールのある遊びを楽しむ

(集団遊び)

・自分たちの好きな鬼ごっこには、自ら入って楽しむ姿が見られるが、初めての遊びや鬼ごっこ以外の遊びは、二人でマイペースに遊ぶのが楽しそうな様子が見られた。

・10月に入って、転がしドッジボールやドッジボールも年長児がしている姿に少しずつ興味をもち、二人で「どうする？入れてもらおうよ」と相談する姿が見られ、しばらくすると、二人で「入れて」と自分たちで仲間に加わった。その遊びの中で、「先に僕が捕ったよ。」「じんたくくん、いっぱい投げてるでしょ」と二人ともボールから手を離さない。また、ボールが取れないことでつまらなさそうな表情も見られた。

・ルールを守らなければならないことは理解しよく守れているが、大勢の友達と遊んでいると、自分の思うようにはいかないことで、つまらなさや強く主張する様子が見られた。

・しかし、翌日は遊びを見つけると、仲間に加わっていた。また、ヘビジャンケンなど、いろいろな遊びに入って、繰り返し楽しむようになった。



◇教師が誘い掛けるのではなく「みんながやってみようという気持ちになるまでこと待ってみようとする。

◇楽しかったという気持ちに教師も一緒に遊びながら共感する。幼児がどんな所に楽しさを感じているのかを読み取り、みんなの中で自分なりの動きをしたり、力を発揮して楽しんでいたりしている姿を認める。

◇大勢の友達と遊んだことで、自分の思い通りにならないことや我慢することも出てくるが、その気持ちを受け止めたり、我慢できたりしたことを十分に認める。

・大勢で遊ぶと、気の合う友達と遊ぶよりも思い通りにならないことや我慢することも増えるが、大勢で遊ぶからこそ、感じられる楽しさやたくさんの方と面白さを共有することができる。自分の好きな遊びだけではなく、いろいろな遊びを楽しむ中で「みんなで作るともっと楽しい」という気持ちを経験することが協同性を育む土台として必要であると考える。運動会を経験し、友達との関わりが深まったこの時期に、「みんなで作るにやってみよう。楽しそう。一緒にやってみよう。」という気持ちで主体的に遊ぶ姿を育てたい。そのためには、教師から誘いかけたり、クラスでやる活動だけではなく、幼児がどの段階まで気持ちが高まってきているか、見取ることも重要ではないかと思う。

・また、このように遊びを通して幼児同士の関係性が広がっていくことは、協同して遊ぶために大切な土台あると考える。クラスやより多くの友達関係の中で自分を思い出し、幼児同士で試行錯誤、葛藤しながら、自分の気持ちの出し方を調整できるようにしていくと考える。

○友達と遊び場や遊びに必要な物をつくり、感じたことを表して一緒に遊ぶことを楽しむ

(ケーキ屋さんごっこ)

- ・家でつくってきたチョコを並べて、隣にケーキづくりができるお店のように環境を用意しておくこと、喜んで木の菓を使ったケーキを先生とやり取りして、喜んで「あたためますか」「500円です」とやり取りすることを楽しみ、二人でお店やさんになるのが面白いようだった。
- ・いろいろなお店屋さんがのった月刊絵本を見せると、「こういう旗みたいなの看板がほしい」と看板を二人でつくった。
- ・年長児がたくさん来てくれると、初めはやり取りに戸惑う様子があったが、だんだんなりきっているようなやり取りをして楽しんで遊んでいた。
- ・「食べるテーブルを用意しなくちゃ」「コロナだから、少し離して置こう」など遊び場を考えて友達とつくって楽しんでいた。



☆幼児が興味をもてるように、お店屋さん風につくって遊べる環境を設定しておいた。

☆家庭で画用紙でチョコをつくってきて、大菓子屋さんのようにして遊んでいたのですが、興味があがっていきつきかけにもなると考え、環境や紙粘土でつくったクッキーや材料を用意した。

◇幼児が「トッピング」「アイスクッキー」など、イメージしていることに応じてやり取りすることで、なりきって会話を楽しんで遊んだり、イメージを広げてつくったりする楽しさを感じられるようにする。

◇友達と考えたり、イメージがなかったりする楽しさと共感すると共に工夫を認め、友達と一緒に遊べる楽しさを味わえるようにする。

◇お財布やお金、看板など、やり取りがより楽しめるようなものを幼児のイメージに応じて材料を提案したり、きっかけをつくったりする。

・二人だと活動が偏るため、秋の自然物に触れて遊んだり、必要なものをつくりたり、イメージを広げて友達とやり取りして遊んだりできることは何がいいのか、幼児の幼児の遊びの様子、興味、タイミングを探った。協同性を育む遊びの豊かな経験をするために、時期やタイミングを逃さず、また、幼児の主體的な遊びになるようにすることはとても、難しい。この遊びに興味をもったが、これまでにいろいろなきっかけを教師自身が試行錯誤してつくったが、なかなかうまくいかないことも多かった。協同性を育むようなねらいを達成できるような遊びを展開するために教師自身がクラスの実態、興味を捉え、いろいろなアプローチしないと、経験してほしいことがないままになり、協同性の芽生えを育めないことになってしまふのだと感じた。

・この遊びを通じて、友達とイメージを広げて遊ぶ楽しさや自分達のアイデアや工夫が形になっていく楽しさを味わうことができた。こういった経験が年長になって、考えを出し合って自分達で進めていく協同した遊びにつながっていくと思う。

<p>4歳 IV期</p>	<p>(1 0 月 下 旬) (1 2 月)</p>	<p>○友達と一緒につくる楽しさやイメージが広がる楽しさを感じる</p> <p>○自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちに気付いたりしながら遊ぶ</p>	<p>(ホワイトタイガークリ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 動物園後は、一番お気に入りのホワイトタイガークリを積み木でつくって、見立てて乗って遊んだ。乗って遊ぶのが楽しいようで、そこから、年長児の動物づくりをまねして、積み木を段ボールに変えてつくった。 「明日は、足つくるう」「その次は顔だね」と毎日少しずつつくって、だんだん出来上がっていくことが嬉しそうだった。 初めは、ガムテープを切るのも、思い思いにやっていたが、「ここも切るから切って」「わっちゃんか形描いて。僕が切るね」と二人で一緒につくろうとすする姿が増えていった。 「こっこのカッパのがいい!!」「これの方がいい」とぶつかり合うと、写真を見ながら、折り合いをつけ決めたりしていた。 出来上がると、大喜びして、走らせたり二人で乗って遊んだりしていた。 	<p>☆年少は素材のイメージやたかさんの材料から選ぶことは難しいので、幼児が「丸っぽい棒みたいな形」など話していたことに近い物を多すぎないようにいくつか用意しておくようにした。</p> <p>◇それぞれがイメージしたことや、アイデアが相手に伝わるように言葉を補って伝え、友達の思いや考えに気付いたり、関心がもてるようにしたりする。</p> <p>◇つくる中で相手に自分の思いや考えを伝えようとする姿を支えたり、自分の思いだけで進めているときには、相手に聞いてみることを促したりし、言葉で伝える経験を重ねていくようにする。</p> <p>◇出来上がった物で、一緒に遊んだり、楽しんでいたりすることで、一緒につくった楽しさや嬉しさが十分に感じられるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 年少の実態としては、協力することや考えを出し合うことは難しいため、ねらいとして「一緒につくる楽しさを味わうこと」「友達に思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりする」ことを目指した。このねらいは、協同して遊ぶ経験にもなる。ただ、教師がねらいをどこにおくかで全く違う活動や実態に合わない活動になってしまつたため、年少としてのねらいを意識することがとても重要だと感じた。 年少はイメージを言葉にするのはとても難しいので、そこは配慮し、言葉を補い、「僕はここをやりたい」「この材料を使いたい」など自分の思いを言葉にして伝えることを経験できるようにした。年長になって、協力して進めたり、考えを出し合ったりする段階に至る前に、二人で伝え合いながら、一緒につくることが、二人なりに手伝い合ったり、自分の得意なことをやったりする姿が遊びの中で見られるようになった。 二人にとっては、協同して遊ぶ経験になったが、今年度の体制、この二人だけからできた活動だと感じた。
-------------------	--------------------------------	---	--	--	---



<p>4歳 IV期 (10月下旬～12月)</p>	<p>11月下旬</p> <p>○友達と一緒に活動する楽しさを味わう</p>	<p>(動物園ごっこ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年長児との動物園ごっこでは、ホワイトタイガーのグループに加わって、つくったり、開園準備に参加した。 ・動物園が開園すると、初めは飼育係を少し不安そうな表情でしていたのだが、何日か遊ぶと「飼育係がいい」とお客さんではなく、飼育係をいつも選んでいた。 ・動物園が開園し、何日間か遊んだときに振り返りをすると「秘密とか話したのが楽しかった!!」と嬉しそうに話していた。 	<p>◇年長児の中で思いを表したり、伝えたりできおくるようにききかけをつくると共に年長児からアプロ一手をかけてもらえるようになる。</p> <p>◇つくるだけでなく、動物の生態に関心があるように一緒に絵本や図鑑を見て、いろいろなことを知る楽しさを感じ、興味を深めたいけるようにする。</p> <p>◇お客さんが喜んでいたり様子や本児がつくったものに対して、年長児が話していたことを伝え、できあがったうれしさやみんなと一緒に動物園を開くことができた楽しさを感じられるようにする。</p> <p>◇本児がどんな様子で年長児の中で過ごしているか、感じているか、育ちが何なのかを捉え、考える。</p>	<p>・この活動では、年長児と一緒に活動する楽しさを味わえることが大きくなねらいとして捉えていた。しかし、この活動が終盤に差し掛かったときに、本児が伝えることの楽しさ、相手に伝わることの嬉しさを味わい、充実感を味わっていることを感じた。</p> <p>・自分の気の合う友達ではなく、たくさんの人との関わりの中で、相手に分かるように伝えようとしていたり、コミュニケーションをはかりながら自分でできることをしようと一生懸命活動したりしたことは、教師が考えていた以上に幼児自身が自信をもつことができた。友達との関わりの中で充実感を味わって遊びを楽しむことが、協同性の芽生えとも言えるのではないだろうか。</p>
<p>4歳 IV期 (10月下旬～12月)</p>	<p>12月中旬</p> <p>○自分の気持ちを伝えたり、相手の話をよく聞いたりしながら遊ぶ</p>	<p>(かるたやトランプ遊び)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年長児とのつながりが少しずつ感じられるようになってきて、「入れて」「抜けるね」「誰から？」など年長児に必要な言葉を伝えたり、やり取りしたりして遊ぶ姿が見られた。 ・「今日は年長さんに勝って、2位だった!!」と楽しさを感じ、「やり方知らない」という新しい遊10月びも年長児から教えてもらいながら遊んでいた。 	<p>◇遊びの中で幼児同士でやり取りする中で伝え合う姿を見守り、その中で相手の話を聞いたり、自分の思いを伝えたりする経験を重ねられるようにする。</p> <p>◇「勝手嬉しい」「負けて悔しい」など遊びの中での感情体験をする中でも、そこに面白さを感じ、繰り返して楽しめるように、気持ちに共感したり、応援して楽しい雰囲気をつくったりする。</p> <p>◇友達がしていることに関心をもち、友達の話をよく聞こうとする姿勢を大切にし、気付けていないときには、気付かせていくようにする。</p>	<p>・友達との関わりを深めて遊ぶ中で、「相手の話に関心をもって聞く」ということがこの年少のこの時期に育てたいことであると思う。</p> <p>・年少の協同性を育てるといって考えると、友達の関わりにおいて、「伝える」「聞く」「やり取りを楽しむ」など、年長の活動につながるような様々な観点がねらいになると感じた。</p>

4歳
V期
1・2月

(1 月) (3 月)

○友達との関わりで遊ぶことを楽しみ、やり取りをしたり、相談したりしながら遊びを進めようとする

(①) 1月 お正月遊び

・戸外での鬼ごっこやこま回しなどは、友達と遊ぶことが楽しい様子がある。年長児が遊んでいる中に「入れて」と伝えて遊んでいるが、年長児に伝わっていないかかったり、何の鬼ごっこなのか、誰が入っているのかわかっていないまま遊んだりしている様子が多い。相手とのやり取りではなく、「入れて」って言うから！という気持ちが見られた。こま回し遊びでも、勝負しているグループに急に加わっている場面が多い。

(②) 2月 戸外遊び

・「バナナ鬼やろう」と年長児に誘い掛けたが、鬼がわからなまま、みんなが逃げ始めてしまい、困っていた。普段は、遊び始めや相談している時に場を離れてしまうことが多かった。「鬼はどうする？」と言っても、伝わらずに困り果てた。年長のゆうきがその様子を見て、「待って待って」と一緒に声をかけてくれ、「鬼は誰？」「何人する？」と伝え、なんとか決め、遊び始めることができた。



◇幼児自身が友達との関わりの中での伝わっていないことで困ったり、自分なりに考えたりする場面を経験できるように少し見守るようにする。

◇教師自身も言葉の伝え合いの様子を深く見て、誰に伝えたいのか、どんな言葉が足りていないのか、把握して援助につなげていく。

◇自分が伝えたいことや決めたいことを一緒に遊ぶ友達が聞いてもらえないことで、感じたことや気付いたことを受け止め、相手の話を聞く大切さや相談するときは、近くで一緒に考えないと困ることなどに気付けるようにする。

◇自分から年長児に誘い掛けたり、やりたいことを伝えたりして、自分から発信する姿を大切にしながら、相手に伝わってうれしいという気持ちが経験できるようにする。

◇「仲間に入ったのみんな知っているかな？」「どっちのチームがたりていないのかな？」など、一緒に遊ぶ仲間になんか伝わっているか、相手にわかるように伝えたり、ハッと気付くようなきっかけをつくる。

・年長児と遊ぶことが多いため、誘い掛けてもらったり、なんとなく仲間に入っていたりしていたため、幼児同士で相談する中で話があまり理解できていなくても、一緒に遊ぶことができてしまう様子があった。

・遊びの中で必要な言葉を伝えることや簡単な言葉のやり取りが2学期には育ってきたが、年長で幼児同士で遊びを進めていく姿の前段階として、3学期は幼児同士での言葉のやり取りが活衆になることが大切な課題と思われた。「相手に伝わっていない」「聞いてもらえない」「遊びたいのに、続かない」など、うまくいかずに困る経験を重ね、どんな伝え方がよくなったのか、どうやって相談するとよまいくのか、友達はどんな話をしてきたのか、など教師は幼児が困り感を経験できるように見守りながら、必要に応じて考え、気付かせて、幼児が試行錯誤しながら友達とやり取りすることこそが、協同性の芽生えを育むために必要だと感じた。

・協同性の芽生えが明らかに見えるものではなく、一度経験したから、すぐに身に付くものではない。そのため、この事例の場面で協同性が芽生えが見られた明らか場面はない。しかし、日々葛藤経験を重ね、試行錯誤しながら、自分の思いの表し方や友達との言葉のやり取りの仕方を学んでいくことこそが協同性の芽生えを育む上でこの時期に必要なことだと思った。

<p>4歳 V期</p> <p>(1 月) (3 月)</p>	<p>○友達の話をよく聞き、思いに気付いたり、受け入れようとしたりする</p>	<p>(戸外遊び)</p> <p>・二学期は、鬼ごっこをしていても、「僕は警察」と決めていて、相手チームの人数が足りなくても、変わる事がなかった。しかし、「どっちが少ない？」という言葉が聞かれるようになってきた。</p> <p>また、自分がバナナ鬼をしたときにも、「みんなはどれやる？」と聞いたり、「どうしようかな。本当はバナナ鬼だけど、ドッジボールしようかな」とみんなのやりたいたいことを聞いて考えたりしていた。</p> <p>・また、遊びから抜ける時には、「この一回が終わったら、やめるね」と伝え、「なんで？」と言われると、「ブランクがやりたいたいんだ。抜けていい？」と相手の話を聞いて、<u>自分のやりたいたいことを伝えていた。</u></p>	<p>◇友達の表情や動きに興味をもって気付いたり、それを受けて考えたりしている姿を大切に認める。</p> <p>◇友達と遊ぶ中で友達の話に耳を傾けたり、相談しようとして友達の輪の中に加わって一緒に考えたりする姿が見られるようになってきたことを、具体的に認める。</p> <p>◇幼児同士で相談してみんなで決めた遊び方が十分に楽しめるように、遊び出しの場面を見守ったり、教師も仲間の一人として、最後まで一緒に遊びを楽しんだりしながら、支えていく。</p>	<p>・三学期に入って、自分自身が困る経験を重ねたことで、友達の気持ちを考えたり、自分の思いを伝えたりするだけではなく、それに対して、友達の気持ちや反応を気にかけ、耳を傾けるようになっていった。</p> <p>・協同性を育む段階を考え、実践を重ねる中で、「友達の話を聞く」「耳を傾けて聞く」というねらいの裏には、友達の表情や動きから、相手の気持ちに関心をもちたいということが、育ちの一段階として重要だと感じた。この気持ちの育ちがあると、教師の仲立ちがなくても、幼児同士のやり取りが活発になり、相手を受け入れたりと、相談したりすることができるようになっていくように思う。</p> <p>・今年度、気持ちの面で、段階を追いながら育ちの姿が見られているのは、一緒に遊ぶ相手が年長児だということも大きいかもしれない。相手が話を聞いてくれているということが、日頃から経験できているので、自分も話を聞くこと、受け入れることが育っていくと思われ、また、年長児がわかるように話をしてくれているので、話をより聞くようになっていくと思われる。</p>
---	---	---	--	---



4歳
V期

(1 月) (3 月)

○友達とみんなを取り組む
楽しさを味わい、つながり
を深める

1月
下旬
・
2月
下旬

(生活発表会に向けての取り組み)

・発表会に向けての劇や合奏では、初めは、「難しいかな。できないかもしれない」という声が聞かれた。取組みの中で、一番意欲につながったのは、年長児の存在だった。
「ゆうたくくんみたいに、明日は大きい声でやってみたいな」「今日、かずてるくん、すごいじょうずだったよね」「昨日お休みだったから、あかりちゃんに教えてくれたよ。」など、友達から刺激を受けたり、友達のいい所に気付いたりして、一緒に取り組む力になっていった。発表会を終えた時には、「難しいと思っただけ、やってみたらできた」という充実感を味わっていた。また、劇では「僕の一番楽しみな」と、みんなの中で自分の役割を考えて、力を発揮しようとするとともに、一緒に出る友達が力を発揮する姿にも関心をもつことができていた。
・発表会に向けて、一緒に頑張る取り組み時間を過ごしたことで、今まで以上に生活や遊びの中で会話が增え、誘い合って遊ぶようになっていった。



◇年長児と一緒に活動する中で、年長児のよさや頑張りがあるのがこれの気持ちにつながるように、その姿を知らせ、目が向けられるようにしたり、一緒に過ごす中で感じたことや気付いたことを日々受け止めたりする。

◇日々の振り返りの時間ももち、自分の頑張ったことや明日頑張りたいことを自分なりに言葉にする経験を大切にし、それを教師も十分に受け止め、認める。

◇年長児が本児の頑張りを認めてくれたり、教えてくれたりする姿や場面を大切にし、年長児とのつながりを感じながら、取り組めるようにする。

◇みんなと一緒に取り組む中で自分の力を発揮する充実感に共感したり、自分の役割を考えて行動する姿を認めたりし、やり遂げた満足感を実感できるようにする。

◇難しいな、ドキドキするな、うれしいな、など様々な感情の揺れ動きに寄り添い、それをみんなと一緒に乗り越えられたという嬉しさや楽しさが自信につながったり、友達とのつながりを深めたりできるような経験になるようにする。

・一緒に一つのものに向かって取り組んだことで、より年長児の一人一人の頑張りやよさに気付くことができ、幼児同士のつながりが深まったように思う。また、年長児に日々、頑張りを認められた経験が、本児自身も相手の頑張りに目を向ける姿につながっていったように感じた。

・互いに認め合うことは協同性を育む上でとても大切なことだが、その土台として、日々の振り返りを大切にし、まずは、自分の日々の変化を認められること、自分自身が実感することはとても大事で、そこから友達に目が向くようになるのではないか。

・長い時間をかけて取り組むこと、四歳では少し高い課題も多かったことで、負担になってしまったこともあった。また、協同性を育む上では、年長児に教えてもらったり、リードしてもらったりするような練習の場面をつくることもできれば、より幼児の協同性を育めたと思う。

5歳

5歳 I期 (6月)	ねらい ○友達と一緒に遊んだり、活動したりする中で、互いの思いを出し合い、共感したり、試したりする	幼児の具体的な姿 (_____協同性の芽生えが見られた場面) (年少組を迎える会) ・人数が少ないこともあり、毎日一緒に遊ぶ中で、年少児に親しみを持って接している。 ・昨年度は自分たちが迎えてもらった年少組を迎える会を行うにあたり、「年少さんに喜んでもらいたい」という共通の思いが見られ、そのためにはどうしたらいいか意見を出す姿が見られた。 ・プレゼントについて話し合うと、「男の子だから遊べるものをプレゼントしたい」「それいいね」など友達の話に共感し、一緒に考えようとする様子もあった。	☆環境構成・◇教師の援助 ☆年少児と一緒に遊ぶ時間を確保し、年少児に親しみがもてるようにする。 ☆昨年度の迎える会の様子を写真で用意する。 ◇写真を一緒に見ながら、昨年度を振り返り、「今度は自分たちがやってあげたい」という意欲に繋がるようにした。 ◇話し合いの時間をじっくり取り、個々の思いや考えを互いに聞くことができるようにした。 ◇年少児の人数が少ないこともあり、プレゼントや装飾は自分ができることや取り組んでみたいことを尊重し、分担しながら「年少組を迎える会」という共通の目的に向かって意欲的に取り組めるようにした。	考察 ・今年度は入園当初から年少児とのかわりが密にあったので、幼児一人一人が年少児に親しみをもち、「喜んでもらいたい」という気持ちが強く見られたように思う。 ・初めての活動だったので、「楽しい」「やってよかった」と感じられるように、幼児の意思を尊重しながら負担して行ったことで、とても意欲的に取り組むことができたように思う。
		(砂遊び) ・砂場に新しく砂を入れてもらったことで、大きな山ができ最初は登って楽しんでいました。次第にその山を利用し、トンネルを掘り始める幼児が出てきた。その様子を見ていた周りの幼児もそれぞれにトンネルを掘り始めた。 ・大きい山なので、高さや方向によってトンネルが繋がらなかった。「なぜ繋がらないのか」を教師や友達と一緒に考え、くり返し試してみる様子が見られた。 ・「上に向かって掘ってみて」「もつと真っ直ぐ！」など、様々な意見に互いに耳を傾け、一緒に試す姿が見	☆自分の好きな遊びや友達と関わって遊ぶ時間もしっかりと確保し、思い切り遊べるようにした。 ☆日々々の幼児の遊びから翌日の遊びを想定し、道具や環境を整えたり、変えたりする。 ◇教師も一緒に遊ぶ中で、個々の幼児理解を深めていく。 ◇友達とのやり取りを見守り、必要に応じて補足をしたり、仲立ちをしたりして友達との関わりを深めたり、遊びを広げたりできるようにする。 ◇降園時には振り返りを行い、他の幼児にも知らせていく。	・友達している遊びに興味を持つ幼児が多く、「何してるの?」「一緒にやってみよう?」など積極的に参加するので、教師も一緒に遊びながら、幼児が個々の思いを伝えたり、友達の話に耳を傾けたりして遊びを進められるように見守り、援助を行うようにした。 ・試行錯誤しながらトンネルが繋がった時にはとても嬉しそうに友達と喜び合う姿が見られた。この経験が、また違う遊びや活動へとつながっていくと感じた。

期	月	ねらい	幼児の具体的な姿 (_____協同性の芽生えが見られた場面)	☆環境構成・◇教師の援助	考察
5歳 Ⅰ期 (6 月)	6月 下旬	○友達との繋がりを深め、 友達と考えを出し合い、 遊ぶことを楽しむ	<p>(ゲームボックスを使って) 「迷路を作ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホールに用意したゲームボックスにとっても興味を持ち、意欲的に遊ぶ姿が見られた。最初は、出てくるものだけで満足していたが、次第に物足りなくなると「2階建てにして」「もっとつなげたい」などの思いが聞かれるようになり、友達とどこに繋げるか相談する姿もあった。 ・「お化け屋敷」「道路」「おうち」など個々にイメージを膨らませて遊ぶ姿が見られ、イメージの違いからトラブルになることもあった。 ・ゲームボックスで遊び始めて1週間経ち、「迷路を作りたい」という思いに多くの幼児が共感をし、「迷路を作って年少さんを呼ぼう」と作り始めた。 	<p>☆悪天候が続いたため、ホールにゲームボックスを用意し、少し繋がった状態で置いておく。</p> <p>☆残りのゲームボックス、ネジは幼児がすぐに使いたせるように置いておく。</p> <p>◇最初は「2階にしたい」などの思いを受け、教師が変えていく。「やってみたい」といふ気持ちが見られたら、ゲームボックスを使うときの約束をクラス全体で確認し、教師と一緒に組み立てを行うようにした。</p> <p>◇単発で終わらせるのではなく、継続的に遊べるように計画を立てた。</p> <p>◇一人一人のイメージに共感しながら、それぞれの思いを他の幼児にも知らせ、互いに興味をもてるようにする。</p>	<p>・天気が悪くなかなか思い切り切り体を動かすことができない時期だったので、とても興味をもって遊ぶことができ、友達との遊びを充実させるよい経験になった。</p> <p>・継続的に遊べる環境を用意したことで、個々の遊びも満足でき、友達の提案にも共感できるようになったのではないかと思います。</p> <p>・ゲームボックスだけではなく、巧技台やマットなども繋げていけるように環境や援助が出来たらもっと遊びが広がったと思う。巧技台の経験がほとんどないようなので取り入れていきたい。</p>
5歳 Ⅱ期 (7 月)	7月	○友達との繋がりを深め、 友達と考えを出し合い、 遊ぶことを楽しむ	<p>(車遊びから街づくりへ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動く車をつくって走らせて遊んでいたことからホールに道をつくると、本物の道のようにラインを引いたり、駐車場をつくったりする姿が見られた。 ・道をどんどん延ばしたい、自分の家をつくる、お店が欲しいなど様々なイメージの中で、共通の「街づくりしたい」という気持ちが芽生えた。そのことで「番号も必要かな」「海もつくりよう」「電車も走らせたい」などさらにイメージを広げ、教師や友達と一緒に実現していこうとする姿が見られた。 	<p>☆幼児の興味を把握し、遊びが広がっていくようにホールに場を設定する。</p> <p>☆段ボールや画用紙、ガムテープなど遊びに必要な物を想定し、用意する。</p> <p>◇「車を走らせたい」「家をつくりたい」など個々の思いを受け止め、一人一人が満足感を感じられるように心掛けた。</p> <p>◇遊びの終わりにそれぞれがどんなものをつくらせるのかを知らせ合う時間を設け、共感したり、友達の遊びを尊重したりできるようにした。</p> <p>◇「一緒につくろう」「手伝って」など必要な言葉を使って相手に伝えていけるようにする。</p>	<p>・今までの遊びよりも規模が大きいのので、一人でやるだけでなく友達と一緒にすることができるようになるように、コミュニケーションや必要な言葉を知らせた。</p> <p>・それぞれの興味や得意・不得意などを考えながら協力し合えるように声掛けや援助をしたが、教師の方が「みんな」という気持ちが強くなりすぎた部分があったので、友達などを改めて考えながら声掛けなどをしていきたい。</p> <p>・幼児のイメージを聞きながらじっくり時間をかけて遊べるように環境を整えたことで、一人一人が「楽しかった」と満足感や達成感を感じることができた活動になったと思う。</p>

<p>期</p>	<p>月</p>	<p>ねらい</p>	<p>幼児の具体的な姿 (_____協同性の芽生えが見られた場面)</p>	<p>☆環境構成・◇教師の援助</p>	<p>考察</p>
<p>5歳 Ⅲ期 (8月下旬) (10月中旬)</p>	<p>10月 下旬</p>	<p>○共通の目的に向かって 相談したり、考えを出 し合ったりし、遊びや 活動を進めようとする</p>	<p>(集団遊び) 「鬼ごっこ」 ・増やし鬼や氷鬼の遊びから、「ゾンビ鬼をし よう」という提案が出てきた。「<u>どんな鬼ご っこにしようか</u>」「<u>ゾンビが追いかけて、捕 まった人がゾンビになる!</u>」「<u>ゾンビも動い ていいことにしようよ</u>」など様々なアイデー アが出てきた。 ・「鬼は〇人でやってみようよ」「復活なし は?」など遊ぶ中で、試したり、工夫したり して自分たちの遊びをつくりあげる様子が見 られた。 ・互いの意見がぶつかり合い、遊びが中断して しまうこともあるが、友達や教師が仲立ちし 少しずつ相手の気持ちを受け入れながら遊ぶ ことができるようになった。</p>	<p>☆幼児が悪い切り走って遊ぶことができるよ うに他の遊びを考えながら場所を確保する。 ◇幼児同士のやり取りや遊びを進めようとす る姿を見守る。 ◇複数の意見でまとまらない時にはすぐに口を 出さず、幼児の葛藤体験を大切にする。その 上で、必要に応じて、一つずつ試してみること を提案し、一緒に遊ぶ中で良いところを認 めたり、楽しさに共感したりした。繰り返して 遊ぶ中で、幼児自身が楽しいと感じるルール を友達と一緒に決めていくことができるよう にする。。</p>	<p>・友達と考えを出し合い、考える姿 や、試してみ、楽しかったか らもう一回同じように遊ぶ」な ど繰り返し遊ぶ中で、一つの「ゾ ンビごっこ」を友達と一緒に作り 上げていくことができた。 ・大きな活動や行事だけでなく、普 段の遊びの中でも協同性の芽生え や育ちが見られることが増えてき た。今までたくさん親しんできた 遊びをきっかけとして、新しい遊 びを提案したり、誘ったりと幼児 同士の関わりが深まってきている ように感じる。ただ、行事や製作 等の他の活動が増える中、まとま って遊べる時間を取ったり、継続 して遊べる様に計画を立てるられ るように心掛けたが、なかなか計 画通りにいかず、遊びが中途半端 になってしまいうこともあった。連 続して遊ぶことができる時間や環 境があることは友達関係や協同性 を育む上で、重要だと考える。</p>

<p>5歳 IV期 (10月下旬)(12月)</p>	<p>月</p>	<p>ねらい</p> <p>○共通の目的に向かって相談したり、考えを出し合ったりし、遊びや活動を進めようとする</p> <p>○友達と一緒に思いを実現したり、見通しをもって進めたりする</p>	<p>幼児の具体的な姿 (____協同性の芽生えが見られた場面)</p> <p>(動物園ごっこ①)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バス遠足をきっかけに動物園をつくることになり、どんな動物園にしたいかを話し合った。自分の思いや考えを離したり、友達の意見を聞いたりする中で、友達の考えに触れて共感したり、自分では思いつかなかったアイディアに驚いたりしながら、「動物園を開園する」という共通の目的に向かって、話し合いを繰り返した。 ・つくる動物やグループが決まると、毎日楽しそうに製作に取り組んでいた。友達と相談しながら段ボールの大きさや組み合わせ方を試行錯誤しながら決めていく姿が見られた。 ・積極的に意見を離せる幼児が一人でアイディアを出して進めようとする姿もあり、意見や考えを話せる幼児と話すことが苦手な幼児との差が大きく見られた。 ・個々の得意な部分を生かして役割を分担したり、友達と協力したりして、一人一人が力を発揮して取り組んでいる。 	<p>☆環境構成・◇教師の援助</p> <p>☆①様々な大きさの段ボール ②空き箱、新聞紙、芯材、などの材料 ③キヤップ、ストロー、紙皿、コップなど ④絵の具、フェルト、布、ラシヤ紙などの色付けの材料</p> <p>遊びの様子や活動状況を見て、すぐに出せるように用意しておく</p> <p>☆図鑑や本を用意し、顔や爪、しっぽなどの細かな部分まで調べられるようにする</p> <p>◇幼児同士のやり取りや意見の言い合いを見守りながら、必要に応じて声を掛けたり、相手の思いに気付けたりしていく。</p> <p>◇活動の始めには、その日にやることをみんなで確認し合うようにし、活動の終わりにつくった部分を他のグループにも知らせたりすることができるようになるように時間を設ける。</p>	<p>考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は活動に戸惑い、なかなか自分の思いや考えを話すことができない幼児もいた。しかし、継続した活動の中で、自分の思いを友達が共感してくれたり、考えたことが形になっていたりすることで少しずつ自信をもつことができるようになってきている。 ・自分の思いだけでは進まない、相手の考えを受け入れるなど、様々な葛藤体験を繰り返すことは協同性を育む上で大切なことであり、受け入れたり、受け入れられたりしながら進めていけるようになることで、遊びや活動が進んでいくということを学ぶよい機会になった。 ・活動を始める前に、その日につくる部分や今日やることなどを具体的に考え、確認することで、見通しをもつことができ、活動に意欲的に取り組む幼児も増えた。
------------------------------------	----------	--	---	---	---



<p>5歳 IV期 (1 0 月 下 旬) (1 2 月)</p>	<p>月</p>	<p>ねらい</p> <p>○自分の役割が分かり、友達と協力して遊びを進める</p> <p>○共通の目的に向かって友達と一緒に遊びを進め、達成感や充実感を味わう</p>	<p>幼児の具体的な姿 (_____協同性の芽生えが見られた場面) (動物園ごっこ②)</p> <p>・動物づくりを進めていくと、「顔も本物みたいに」「尻尾もあるね」「模様はどうやってつけようか」など次々と考えが出てくるようになった。そこで、友達と一緒に遊びを進めやすいように開園までの予定表をつくった。つくる物の目安や開園まで何日あるかなどを幼児同士で確認しあい、「今日は絶対に○だけは終わらせようね」などと目標を共有する姿があった。</p> <p>・活動の終わりに、今日できた部分、工夫したところや頑張ったことなどを発表するようになったことで、互いのグループの様子を知ったり、刺激を受けたりしている様子があった。</p> <p>・動物園の開園では、積極的にお客さんに話かけたり、自分で調べた動物の秘密を教えたりしていた。「知らなかった」「すごい」と認めてもらうことで、自信となり、自分なりに楽しみながらお客さんとのやり取りをしていった。また、開園できたことの達成感や充実感を一人一人が感じ、「また明日も開園しよう」「お客さんにもなってみたいな」と繰り返し楽しんでいった。</p>	<p>☆環境構成・◇教師の援助</p> <p>☆開園までの予定表を大きく用意し、各グループごとに見通しがもてるようにする</p> <p>◇イメージが沢山出てきたことで、話し合っ て決めた部分ではなく勝手に進めようとしてしまう幼児もいるので、確認ができるように促したり、自分の気持ちを伝えるように援助したりした。</p> <p>◇使う素材や大きさ、接着など様々なことで悩み、迷う姿が見られたが、教師はできるだけ見守るようにし、自分たちが「これでつこう」と納得して進められるように心掛けた。必要に応じて一緒に考えたり、ヒントを出したりして援助した。</p>	<p>考察</p> <p>・動物園の開園に向けて、予定表をつくったことで、視覚的に目標がはっきりし、幼児の意欲が高まったように思う。また、見通しがないことで不安になってしまっ た幼児も、毎日友達と確認し、表記することで、自分自身で確認をし、安心して活動することができた。</p> <p>・毎日活動を共にしていても、なかなか、思いや考えを相手に分かるように伝えることが難しかったり、相手にうまく伝わらなくてイライラしたりすることもあったので、教師が見守りと援助を見極め、柔軟に対応していくことが大切だと感じた。</p>
---	----------	--	--	--	--

<p>期</p> <p>5歳 Ⅴ期</p> <p>(1 月) (3 月)</p>	<p>月</p> <p>1 月</p>	<p>ねらい</p> <p>○遊びや活動の中で、 自分の力を発揮し、 互いに認め合いなが ら進める</p>	<p>幼児の具体的な姿 (_____協同性の芽生えが見られた場面)</p> <p>(正月遊び)</p> <p>・自分の知っている遊びを友達に教えた り、一緒に考えたりしながら一緒に遊 ぶ姿が見られる。その中で、互いの知 っているルールを確認し合い、どのよ うなルールで遊ぶかを一緒に考える姿 が見られる。</p> <p>・コマやけん玉など、繰り返し練習する 姿がある。上手くできるようになった 友達に「上手だね」「どうやったら上 手できるか教えて」など友達の姿を 認めたり、自分の知っていることを友 達に教えたりする様子があった。 友達に刺激を受け、自分もできるよ うになりたいと努力したり、友達と競い 合ったりして繰り返し楽しんでいた。</p>	<p>☆環境構成・◇教師の援助</p> <p>☆それぞれの遊びをじっくり楽しめるよ うにコーナーをつくる。また、道具は 使いやすいうちに置いておく。</p> <p>◇教師も一緒に遊ぶ中で、幼児の考えや 思いを認め、互いに知らせられるよう にする。</p> <p>◇できるよくなるように繰り返し努力す る姿を認め、自信をもったり、自分の 力を発揮したりすることができるよう にする。</p> <p>◇友達の話を聞いて、取り入れたり、コ ツや遊び方を聞いて真似をしたりでき るように声を掛けたり、気付かせたり する。</p>	<p>考察</p> <p>・友達と遊べる時間を計画的につくる ことで、幼児もやりたい遊びやでき るようになりたことにじっくり取り 組む事ができた。そうすることで、 友達と楽しい遊び方を考えたり、友 達の姿を認めたりできるようになり、 また、繰り返し努力し、自分の力を 発揮しようとする様子も見られた。</p> <p>・幼児同士が考えを出し合ったり、一 緒に遊びを考えたりすることができ るように、教師は見守ることを心掛 け、必要に応じて仲立ちや補足など を行うようにした。</p> <p>・遊びの中や隙間などに、上手にな ったことを見せてもらったり、遊び について話をしてもらったりするこ とで、興味・関心を高められるよう にした。しかし、興味が偏りがあり、 全体に広がるまでに時間がかかった。 もっと誘いかけ、きっかけをつくつ たり、コツや面白さを伝えていける ようにし、もって友達と認め合っ て遊べる経験をすることができるとよ かった。</p>
--	---------------------	---	---	--	--



<p>5歳 V期 (1 月) (3 月)</p>	<p>○遊びや活動の中で、自分の力を発揮し、互いに認め合いながら進める</p>	<p>(生活発表会 劇)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活発表会に向け、どんな劇をするか、みんなで話し合いを行った。人前で話することが苦手な幼児は、劇をすることに消極的だった。しかし、劇が決まり、劇ごっこをして繰り返し遊ぶことで、少しずつ自分の言葉で話せるようになった。そのことを教師や友達に認めてもらえたことが自信となり、<u>配役決めでは、積極的に自分のやりたい役に立候補できるようになった。</u> <ul style="list-style-type: none"> 「○○って言ったらどうかな」「次は○ちゃん番だよ」など、<u>友達の台詞と一緒に考えたり、教えてあげたりしながら、劇をつくっていく様子が見られた。</u>また、ビデオや絵本を思い出しながら、自分なりに表現しようとしたり、<u>動きを考えた</u>りする幼児を見て、「すごいな」と友達を認め、<u>自分も真似をしてみたり自分なりにやってみようとする様子が見られるようになった。</u> <ul style="list-style-type: none"> 生活発表会当日は、一人一人が<u>自分の力を存分に発揮し、友達と力を合わせ、劇を成功させることができ、大きな拍手をもらうことができ、みんなでやり遂げた達成感を感じることができた。</u> 	<p>☆絵本やビデオを利用し、幼児がイメージしやすいようにする。</p> <p>☆お面を用意する。</p> <p>☆遊びの様子を見ながら、小道具や音楽などを出せるように用意しておく。</p> <p>◇劇の発表に向け、幼児によって取り組み方や気持ちに違いがあるので、<u>実態を把握し、幼児が無理なく楽しんで取り組むことができるように計画を立てた。</u></p> <p>劇遊びを通じて、様々な役を知ったり友達のやり取りを楽しんだりすることができるようになり、遊びに取り入れていく。</p> <p>◇「こうやって言ってみようかな」「こんな動きをしてみよう」という気持ちを大切に、自分なりにできたことを認めたり、他の幼児にも知らせたりする。</p> <p>◇困っている友達に教えたり、一緒に考えたりできるように、きっかけをつくり、見守る。必要に応じて教師も仲立ちしていく。</p> <p>◇自分たちが演じている様子を撮影し、観ることとで、自分がどう見えているのかを知ったり友達の頑張りに気付いたりできるようにし、お互いに認め合って共通の目的に向かって頑張れるようにする。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 話をすることに抵抗や不安を感じる幼児がいる実態があったので、少しでも抵抗がなくなったり、自信をもったりすることができるように進め方を考えた。劇ごっこの中で、友達と一緒に自由に動いたり、真似をして話したりする時間を設けたことで、<u>どんなふうに進んでいくかを知ったり、話したことを友達に認めてもらい安心したりする様子が見られた。</u> 友達に助けってもらいながらできるよになったり、出来たことを認めてもらったりしながら、一緒に一つのものを作り上げていく楽しさや、達成感は幼児の自信となり、<u>積極性や挑戦する気持ちなど様々な変化が見られた。</u> 年間を通してもっと表現したりなりきって遊んだりできるように環境を整え、計画的に取り入れていくことができれば、<u>五歳児のこの時期、もっと様々な協同性の育みが活動を通して経験することができたのではないかな</u>と思う。
--------------------------------------	---	--	---	---

<p>5歳 V期 (1 月 ~ 3 月)</p>	<p>自信をもって行動し、 友達と一緒に協力して 園生活を進める</p>	<p>(主体的に園生活を送る)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その日の予定や時間を見ながら、何をすべきか考え、行動できる幼児が増えた。その中で、友達のことを気に掛けたり、声を掛け、行動や活動へ促したりする様子が多く見られるようになった。 ・今まで、教師に確認してからでないと、安心して行動できなかつた幼児も、<u>友達の声掛けに応じて一緒に行動したり、友達の様子をみて、安心して動いたりすること</u>ができるようになった。 ・「お弁当だから机を準備しよう」「絵本を借りに行くからバックやカードが必要だ」など、<u>遊びや活動のために必要なことを自分なりに考えて、やろうとする幼児の姿</u>があり、<u>友達に刺激を受け、自分から進んで行動しようとする様子</u>が見られるようになった。教師がいなくても、<u>友達と協力したり、分担したりしながら一緒に園生活を進められることも増え、主体的に行動できる</u>ようになった。 	<p>☆一日の流れや予定が分かりやすいように表示する。また、時間も一緒に表示する。</p> <p>☆初めてのことや普段と変わることはいち早く示しておく</p> <p>◇幼児が自分で考え行動できるように見守り、できたことを認めたり、褒めたりし、自信をもって行動できるようにする。不安が強い幼児にはこまめに声掛けをし、間違っていないことを知らせたり、「先に○○するととっても良いよ」と提案したりしていく。</p> <p>◇遊びや活動に必要なことを友達と協力したり、分担したりして互いに声を掛け合い、進めていけるようにした。また、積極的に動く幼児に他児への声掛けを促したり、準備や片付けが早くできたことや協力したことを認めたりしていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・表示を行ったことで、幼児が自分で確認しながら行動することに慣れ、協同性が育ってきたことで、教師ではなく、友達同士で気付け合ったり、友達の姿を真似したりできるようになった。しかし、活動や遊びの様子次第で変更することも多く、急な変更が苦手な幼児に対しては教師の関わりが必要になることもある。幼児や場面に応じて、見守りや援助をしていく必要がある。 ・できたことを一つ一つ細かく認めたり、褒めたりすることで、自分の行動に自信をもつことができるようになり、その姿が他の幼児にも良い影響を与えようと思う。友達同士の関わりや信頼関係が深まったこの時期だからこそ、友達の姿に刺激を受け、行動できるようになってほしい。
------------------------------------	--	---	---	--

6. 事例を通して

- ・初めての集団生活をする4歳児は、まずは、一人一人が教師との信頼関係を基盤に、安心して自分のやりたい遊びを十分に楽しむようにすることが大切である。その時、教師は幼児の思いに寄り添い、一緒に遊びを楽しむように環境構成の工夫や遊びに満足できる十分な時間の確保などに配慮したりすることが必要である。そして、自分の好きな遊びを見つけた、安心して園生活を過ごせるようになる、徐々に幼児は、教師を介して同じ場で遊ぶ友達に興味をもち、同じことをする楽しさを感じるようになる。つまり、幼児が友達に関心をもち、遊ぶ姿は、友達と協同して遊ぶ第一歩である。そのため教師は、発達段階に応じた活動の工夫や友達（人間）関係の広がりを感じて遊ぶ楽しさを感じることが重要である。友達に関心をもち始めた時期には、クラスで簡単なゲームやリズム遊び、絵本の読み聞かせなど、触れ合って遊ぶ楽しさを感じたり、みんなで楽しさを共有したりする機会を大切に、教師や友達と活動する楽しさを味わえるようにすることが必要である。その時間を重ねることで、クラスの友達とのつながりが生まれ、数名の友達が集まって遊んでいると「やってみたいな」「仲間に入れて欲しい」という気持ちが出てくる。芽生え、友達関係の広がりが見られるようになる。友達との関わりが楽しくなってきた2学期には、ヘビジャンケンや鬼ごっこなどの集団の遊びを取り入れていく。それは、大勢の友達と遊ぶ楽しさを知る機会でもあるが、時には自分の思い通りにならないという葛藤や「嬉しい」「悔しい」など様々な感情体験をすることで自分の感情の出し方、折り合いの付け方などを学んでいくことができる。その際、教師として必要なことは、幼児の心の動きを受け止め、必要な言葉を補いながら友達に自分の気持ちを知ったり、友達の思いを知ったりして、幼児が友達との関わり方を身に付けられるようにしていくことである。これらの経験を積み重ねていく中で、やがて3学期になると、友達と誘い合って遊ぶ姿が見られ、友達の中で思いを出し、関わりを十分に楽しみながら遊ぶようになっていくことが4歳児として、幼児の協同性を育む上で大切なことだと事例を通して分かった。
- ・4歳児は、年間を通して、個の遊びから「友達と遊ぶのが楽しい」「友達といるのが楽しい」という気持ちが出てくる。その感情が5歳児で友達と関わりを深めて協同して遊ぶ姿へとつながっていく。5歳児にならぬ姿を見据えて、友達との関わりが段階を追って広がっていくように援助することが大事だと思う。
- ・友達と一緒に遊ぶことが楽しいと感じ始める5歳児には、同じ場で遊ぶ友達とイメージを共有したり、思いを出し合いながら遊びを進めたりする経験が積み重なるように、保育計画や環境を工夫することが重要である。その計画や環境の元、子供たちは遊びの中で、友達同士と一緒に遊びを進めていく楽しさを感じる成功体験があれば、互いの思いの相違から遊びが停滞してしまう経験もする。停滞した時には教師が子供たちの葛藤に寄り添い乗り越えていけるようにしたり、相手の考えを聞き、仲介し、受け入れて遊ぶ楽しさを感じ取れるように関わったりする。これらを繰り返すことにより、子供たちは徐々に協同性が芽生え、友達と一緒に生活したり遊び合ったりする姿へとつながっていくと思う。
- ・5歳児は、一人一人が自己を発揮し、友達と意見を出し合って目的やルールを共有しながら遊びを進めていくことができるようになるためには、互いの良さに気付いたり、認め合ったりできるようなクラスの雰囲気をつくることが大切である。

7. おわりに

協同性を育むためには、各年齢の発達を理解し、その時期に必要な経験ができるように教師は見通しをもって遊びや活動を計画することがとても大切であると分かった。そして教師は、幼児の協同性の芽生えを見取り、何を育てたいのか焦点を絞り、実態に合わせて適切に援助することで、より友達との関わりを深め、協同して活動する充実感を味わっていくことができるのだと思った。

